

CONTENTS

「ユニセフセミナー大阪 2026」講演録  
2-3 『『こどもまんなか』ってなんだろう』  
桜井智恵子さん

〈考察〉  
4 教育における「構造的暴力」を問う  
インターン・朝川彩名さん

## ベネズエラ大地震、逆境を生き抜く子どもたち

6月24日にベネズエラ北中部の沿岸地域をマグニチュード7.2と7.5の大地震が襲いました。公式発表では4,561人超が亡くなり、1万6,740人が負傷したと伝えられています。ユニセフは各分野で、子ども16万9,000人を含む約47万人を対象に緊急支援をしています。首都カラカスでは現在避難所となっている学校の再開が急務となり、また地震で受けた子どもたちのこころのケア、居場所づくりなど、子どもの命と権利を守るための支援を行っています。

大地震などの災害や紛争が各地で発生し、貧困の問題などで権利を脅かされ、追いつめられる子どもたち。先ごろ開かれたセミナーでは、生まれながら持っている子どもの権利を大人と社会がどう守るのかについて考えました。「子どもたちの声をしっかり受け取り、暮らしやすい豊かな未来へと繋いでいくことが私たちの課題です」（セミナー告知文の一節）。しっかりと声を聞く、思いを新たにしました。

【参考資料】ユニセフ「プレスリリース」2026年7月14日発



避難所に設置された子どもにやさしい空間で、レクリエーションを楽しむ子どもたち（ベネズエラ 2026年7月19日撮影） ©UNICEF/UN0893530/Garcia



## ユニセフセミナー大阪 2026

### 第一部 講演 「『こどもまんなか』ってなんだろう」

講師：桜井智恵子さん（学校法人自由学園最高学部特任教授）

7月11日、ユニセフ活動への理解を深める「ユニセフセミナー大阪 2026」が大阪市中央公会堂で開催され、講師に桜井智恵子先生を迎え「子どもの権利」について考えました。60数名参加。  
(近藤敦子記)

### 子どもを追いつめる状況

兵庫県川西市の人権オンブズパーソンの一員として、日本で最初にできた、子どもたちの声を聞きながら子どもがSOSを出している状況を変えてゆくという第三者システムの仕事をしました。いろいろな自治体のオンブズパーソンを担い、10年以上学校現場、教育現場、家庭に関わるチャンスを経験してきました。

今、子どもを追いつめる状況はどうなっているのか。子どもたちの様子はそんなに変わってきているようには思えませんが、だんだん追いつめられている感が強い。「あんまりややこしいことを言って反抗しないほうがいいよ。とりあえず学校の言うことを聞いとけ」という規範に同調する高校生が増えています。これは成績を握られているということです。海外では「Fridays for the future」(未来のための金曜日)のような、子どもたちがちょっと飛び出てストライキを楽しみながら、大人たちにNOを突き付けてきました。そういった動きは日本ではほとんど見受けられません。

日本の小学校、中学校では画一的な教育により社会全体の底上げと協調性が重要視されるなかで、子どもの自殺者だけは増えています。約7割が高校生です。2つ3つとしんどいことが重なり、自分の将来はもうないと考えます。いじめではありません。子どもたちが亡くなるのは大人社会、経済社会への失望が作っています。

また日本の学校は1958年につくられた学習指導要領により、全員に同じカリキュラムを提供し、教育格差を縮小することで、国を豊かにしようとしてきました。全国学力テストが入った2007年から教えるものは増えました。学校は、一心に頑張らせることを担わされています。子どもも一年生のときは元気でも五年生、六年生、中学になると疲れてきます。大阪の子どもたちへのアンケートで、一番したいことは「休むこと」です。

無気力になった子どもたちが陥るのは、自責と他害です。自分を責めて、リストカットやオーバードーズをする。他害は、自分が「無敵の人」になる行為です。京都アニメーションや池田小学校を襲う。障害者を刺殺する。彼らは学校時代に「できない」というラベルを張られ、自分自身を低く認識させられ続けたことで、テロのような「拡大自殺」をする。「平和学の父」と言われるヨハン・ガルトゥングはこれを「構造的暴力」と呼びました。

### 子どもの権利はどう考えられているか

子どもの権利条約は第三世界の話ではなく、私たちの国で

非常に心配なことを考えさせられる条約だと思ったことがあります。日本は1994年に批准し、締約国は5年ごとに取り組み状況を国連子どもの権利委員会に報告し、審査を受ける仕組みになっています。最初の審査に委員の Pais さんが来日した際、私に「どうして日本は子どもと言ったら学習権なの？教育権なの？」と驚かれたことがあります。日本では、子どもの権利は学習や教育に集約して語られ、「学習支援」が注目されがちです。

子どもの権利はどう考えられているのか。よくビジネスの中で、「子どもの権利をちゃんと守ることを考えたい」と言われます。私はいつも意味が分からないと思っています。グリーンウォッシュのように、やっているけど逆に成長・開発主義を隠している。「こどもまんなか」という言葉は、それをしてしまうくらいがあるように思われます。「子どもの権利」と言ったら「子どもの最善の利益」と「子どもの自己決定、子どもの意見表明」を必ずセットで使います。子どもの意見表明を受けて、子どもの最善を考えるわけですが、子どもの意見表明は置いておき、大人が子どもの将来について考える、これを「悪しき教育的配慮」と言います。大人が勝手に、これは子どもの最善の利益だと子どもを優しく、時に厳しく指導する。リスクワードが「その子のために」です。しっかり勉強させて成績を上げることが、その子のためなんだと言われて、ホントかと思う先生は世の中の常識との板ばさみで胃が痛くなります。

### 子どもにとって最善とは

子どもの最善って何だと考えたときに、権利は権利思想に支えられています。哲学に支えられています。社会の一番大事なことが権利の思想になってゆく。子どもの最善と言ったら、こんな過剰労働で非正規が蔓延する雇用の環境で、なんとか仕事に就けるよう学力保障するのだろうか。今は売り手市場だけれども、大企業はよくても95%以上の中小企業はか



つかつで回っています。大手企業とそうでない家内工業のような、でもなくてはならないものを一生懸命作っている所との差というのは、実は子どもと深く関わって来る話になります。

「子どもの権利条約」のルーツはヤヌシュ・コルチャックです。コルチャックはユダヤ系ポーランド人の小児科医で、第一次世界大戦に従軍し、親を亡くした大勢の子どもたちの悲惨な状況を見て、ポーランドに2つの子どもの家を作ります。コルチャックの思想は国家と資本主義を問題にした、まさに「戦争の中で生まれた思想」です。

私はたくさんの学校現場で子どもたちに出合ってきました。高校生から小学生までみんな政治的な質問を投げかけてきました。子どもの権利の保障は「子どもの支援」ではありません。

コルチャックの思想やコルチャックの戦いに私たちは立ち返りたい。日本は自己責任論と能力主義が強い社会です。その排他的な社会そのものを見抜きたいと思います。

私がフィリピンに留学中、マニラで出会った子どもたちは、日本の大きな工場が建てられて、人や環境がどんどん収奪され、スラムができていった中で暮らしていました。開発主義によってアジアの子どもたちがきつくなったのと同じことが、今も起こっています。子ども問題は経済の問題です。とにかくそうやって稼ぐことを背景とした支援をすることで、結局それを支えているとしたら、どうして支援が必要となったのか、両にらみで私たちは考えたい。子どもに失礼のない大人でいたいと思っています。

## 第二部 座談会 私たちの意見や悩みを先生に聞いてみよう！

座談会には3人のパネリストが登壇し、学校生活や教育について、日ごろ感じていることを語りました。発表内容の抜粋と桜井先生からのコメントを紹介します。

### 聞いてもらいたい その1

#### 学校という場で苦しめられてきた9年間 三木碧彩さん (大阪暁光高等学校3年生)

私が「学校」という社会の中で苦しみ、大きく傷つけられていると感じるようになったのは、小学校5年生の頃からです。担任の先生は「こんなも分かんのか!」と強い言葉で叱る人でした。宿題を忘れた生徒は、毎日昼休みにクラスの全員で運動場で遊ぶ「みんなあそび」の時間に参加できないという決まりがありました。ある日、宿題を学校に置いて帰ってしまい、やる事が出来なかった私は、怖くなり家で泣き続け、とうとう学校を休みました。親は「宿題くらい、たいしたことない」と呆れるように言っていましたが、当時の私にとって「宿題を忘れる」ということは、「先生に怒られる」だけではなく、「さらし者にされる」「クラスメイトとして見てもらえなくなる」と感じていました。

—中略—

私は義務教育の9年間、学校という場所で苦しめられてきました。そんな私が、こんなにも成長できたのは、支えてくれた先生や共に学び、悩みながら学校をつくってきた仲間が存在が大きかったと思います。中学生まで、苦しんでいるのは、先生と自分や親のせいだと思っていたけれど、社会の仕組みや、それに向けられる偏見や差別があったからだと感じかされました。高校でいろんな経験や学びに取り組んだことで、生きる意味と希望を得られたと思っています。点数だけで人の価値を決めるのではなく、一人ひとりの声や個性が大切にされる教育が広がってほしいと思います。そして私自身も将来教師になり、誰もが安心して学ぶことのできる学校づくりに関わっていきたくと思っています。

#### ■ 桜井先生のコメント

三木さんのお話は、皆さん聞いて緊張しましたよね。背筋が伸びるような…。例えばNHKのドキュメンタリーなどは、三木さんのようなお話は大好きです。ストーリーとして消費



されてゆきます。だけど三木さんは消費されるものではないんですね。三木さんがそんなことを感じるようになったのはなんでだろう。受け取る側は掴まないといけない。とんでもない先生がいる、で止まらない。周りの大人がそれを理解して、「脱構築」と言うんですが、立て直してゆく。どうして支えてくれる先生でいい状況になっているのか。先生が支えるだけでいいのか、私たち大人はそれを掴んで、おしゃべりする。おしゃべりができるというのはすごく大事です。

### 聞いてもらいたい その2

#### 自由になってはいけない?

奥野 隼さん  
(近畿大学附属高等学校2年生)

僕からは学校生活で二つ質問したいと思っています。第一は、なぜ日本には校則が存在しているのか、第二は、日本の義務教育では球技大会や運動会、合唱コンクールなど、なにかと順位を決めがちだと思いますが、なぜですか。海外では運動会がなく、自由に参加して運動を楽しむというのがメインです。

#### ■ 桜井先生のコメント

日本の校則は戦前に陸軍や師範学校の校則を引きついでいます。私たちが校則を語るとき、スカートの長さとか先生との関係ばかり言うけど、もう少し奥深い話があるということに気づかないといけない。校則は「従わせる」ためのルールなので、個性がどうかは関係がありません。

運動会や合唱コンクールですが、海外では運動会をフィールドデイと言って野外レクリエーションとして好きなことをやります。日本の運動会はレクリエーションとは程遠い感じで、競争するのが特徴です。合唱コンクールは1954年にNHKが全国音楽コンクールを作り、音楽が教科に入ったころから盛んになりました。教科だから点数を付ける。その標準をクリアした人がいいという制度との流れがあります。



聞いてもらいたい その3

## 身を持って知る現実の重み

ジョアン・カルマさん  
(フィリピン出身 来日して14年、英語教師)

多くのフィリピン人は幼いころからすでに「自分の役割」や「責任」の重みを身をもって知っています。私たちはこれらを言葉として教わるのではなく、自ら体験するのです。教科書からこれらの概念を学ぶのではなく、生き抜くための日々の現実、貧困、家族への義務などを通してそれらを身につけ、生きてゆくのです。



### ■ 桜井先生のコメント

奥野克巳さんの『ありがとうもごめんなさいもいらぬ森

の民と暮らして人類学者が考えたこと』という本は私が大好きな本ですが、今さまざまな社会や子どものことを考えると文化人類学が注目されているのは、近代や現代のやり方がだいぶ無理が出てきたから。この本の中では、何でもきっちりやらなければならないかったり、そんなことは僕たちの暮らしに要らない。だけど僕たちは一緒に生きてゆくんだということがリアルに描かれて、ジョアンさんが仰ったように一緒にやる、分け合うことはフィリピンでは当たり前のことです。

ごく少数のスーパーリッチとそれ以外の人たちははっきり分断されてゆく時代に、つながり合うのは誰となのか。どういう社会的連帯が必要なのかは、見えやすくなってきたように思われます。可哀そうなフィリピン子どもたちを救う話ではなく、その要因となっている今の経済と向き合ってゆくのがとても大事です。

### 考察

## 教育における「構造的暴力」を問う

今回のセミナーでは、教育における「構造的暴力」が大きなキーワードとなっていました。これは、ノルウェーの研究者、ヨハン・ガルトゥングによって提唱された概念であり、「暴力や不平等の原因を特定の個人や集団ではなく、社会の制度や価値観など、社会構造に見出す」ことに着目した概念である。この視点に立つことで、目に見える表面的な問題だけでなく、その背景にある社会構造を問い直すことの重要性に気付かされた。

桜井先生は「不登校には、責任を、当事者や直接的な要因になった周りの人に押し付けるだけでは解決できないほど複雑な背景がある」と強く強調された。「成績をとれない本人が悪い」「いじめた同級生が悪い」「怒鳴った先生が悪い」と、個人の責任に還元してしまうと、根本的な問題の解決にはならないからである。

ここで重要なことは、「なぜその状況が生まれているのか」その背景を考えることである。「なぜ、成績が悪いと学校での居場所を失ってしまうのか」「いじめた子どもにはどのような背景があるのか」「なぜ、先生はそのような反応を示したのか」という問いを深めていく中で、競争を重視する社会やそれを生み出した経済状況、歴史的価値観など、全ての人々にとって身近な問題が見えてくることがある。南アフリカ共和国の元大統領ネルソン・マンデラは「子どもたちの接し方ほど、その社会の本質を鋭く表すものはない」と言い残したが、まさに、子どもたちが置かれた状況や子どもの権利が保障されているかどうかは社会そのものを映し出していると言える。つまり、子どもに関係する問題は一時的な救済支援だけで解決できるほど単純ではなく、社会構造そのものへの働きかけが求められる複雑な問題なのである。

構造への問いを、私たち一人ひとりが持つことは、社会のあり方を見つめ直し、変革に向けて行動を起こす第一歩になる。これらを踏まえ、大阪ユニセフ協会のような地域事務所は、世界の子どもたちの現状を共有するとどまらず、その背景にある構造を問い直す視点を市民へ提示し、社会について主体的に考える機会を広げていく役割が求められるのではないだろうか。



朝川彩名  
(大阪ユニセフ協会  
インターン生)

### 「子どものために」に潜む構造的暴力

子どもと大人の関係性にも実は構造的暴力が潜んでいる。その一例が「子どものために」という言葉である。この言葉は一見、子どもの将来や安全を思って発せられる。しかし、実際には、世間体や自分の夢を子どもに叶えてほしいという、大人の不安が隠れている場合が多い。このような不安は、情勢不安による将来への恐怖や学歴社会、コンプレックスなどによって引き起こされているが、それを、「あなたのために」という「優しい」言葉で覆い隠すことで、子どもたちの感情や声を押し潰す危険性がある。

座談会の席上、「こうして欲しかったことはある？」という問いに対して、高校生の三木さんは「自分の意見や考えが間違っていたとしても受け止めて欲しかった。」と語った。この言葉から、子どもたちが求めていることは「正しさ」ではなく、一人の人間として、自分の意見や思いを安心して表現し、受け止めてもらうことなのだとわかる。

「受け止めること」は「なんでも受け入れる」という意味ではない。重要なことは、子どもが対等な「ひと」であるということ。を前提に子どもたちと建設的な対話を重ねていくことである。まずは、子どもたちの言葉に対して大人の視点で価値判断をせず、まっすぐに受け止め、子どもと一緒に考えていくことこそが、「子どもの権利」を保障する第一歩になるのではないか。

### 異なる社会構造と「教育」の意義

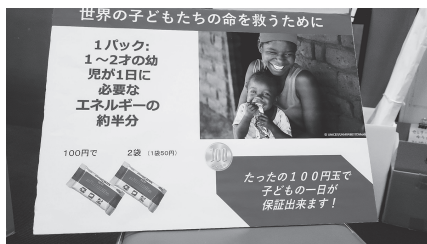
座談会では、それぞれ異なる立場から教育体験について語られた。その中で、最も印象的なことは、置かれた環境や立場によって、子どもたちにとっての「教育」の意味は全く異なるということである。「教育」は「特権」にも「支配」にも「苦痛」にも「希望」にもなり得る。

子どもたちが学校に通うこと自体が困難な地域では、教育は家族を貧困の連鎖から断ち切るための主な方法となる。一方で、教育にアクセスできたとしても、激しい競争や画一的な価値観が求められる環境では、教育が子どもたちを苦しめる要因にもなりかねない。同じ「教育」であっても、その意味は子どもたちの置かれた社会的・文化的背景によって大きく異なる。

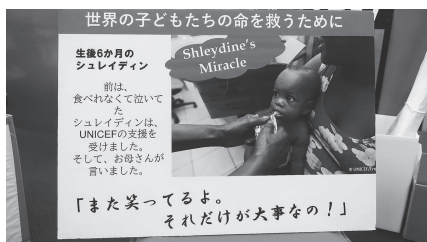
だからこそ、子どもたち自身がどのように教育を捉え、何を感じているのかに耳を傾ける機会が教育のあり方を考える上で必要不可欠である。その際に、前述の、構造を問う視点や、子どもを権利の主体として尊重する視点を問い入れることが重要である。

## 募金につながるポスターはどっち？

6月27日のゴンタ募金活動では、心理学の視点から2種類のポスターを制作し、どちらがより募金につながるかを比較しました。結果はAの「事実・統計」がBの「一人の子どもストーリー」より募金額で上回りました。とくに「たったの100円玉で子どもの一日を保証できます！」という具体的なメッセージは、多くの方の関心を引いたように感じました。また、小学生から高校生まで多くの若者が足を止めてポスターを読んでくれ、その姿がとても印象的でした。7月25日のゴンタ募金でもAのパネルが優勢でした。



A「事実・統計」



B「一人の子どもストーリー」

(インターン・中瀬りこ)

No.27

Bravo

### 思いの輪広がる温かい場所

私は、約5カ月間、インターン生として、写真展や出前授業、広報募金、『大阪通信』の執筆に携わりました。世界でまさに起きている現実を、広報活動を通して人々に伝え、少しでもユニセフと接点を持っていただくことにやりがいを感じました。一方で、紛争のようなセンシティブな内容を扱う際には、中立的な立場から異なる多様な立場の方々に届けることに難しさを感じました。しかし、悩んでいるときには、経験豊富なボランティアの方々が寄り添ってくださいました。協会では、強い情熱を持って活躍されている方々が多くいらっしゃいます。思いの輪が広がる温かい場所で私も活動させていただき、かけがえのない経験になりました。

(インターン・朝川彩名)

## 活動フォトニュース

### 御堂筋ふれあいバザー

5月29日 大阪ガス本社ビル前

障がい者の就労支援と社会参加を目的としたこのバザーで、数多くのブースが立ち並び「環境」をテーマに販売やワークショップが行われました。



ユニセフもパネルの展示や手作り缶バッジ体験、広報募金を実施し、お昼休憩中に通りかかった会社員の方々が多数来場してくださいました。来場者と言葉を交わしながら、ユニセフの活動を知っていただく貴重な機会となりました。

(朝川)

### ゴンタ募金

5月30日 近鉄上本町駅構内

ほどよく賑やかで、ほどよく落ち着く場所はないか……新たな街頭募金活動として1月からスタートしたゴンタ募金は、拠点を探して一転二転しましたが、ようやく上本町駅構内に落ち着くことができました。さっそく初めての呼びかけが行われ、たくさんの寄付で上々の滑り出しとなりました。小さな手で硬貨を入れてくれた坊や、財布を叩いて協力して下さった学生さん、そして上本町の皆さん、よろしくお願いします。



(近藤)

### さかい福祉まつり出店記

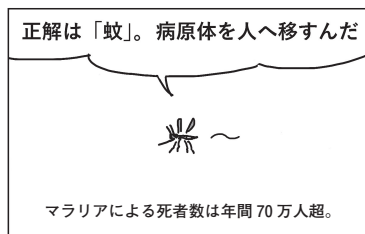
6月21日 堺市役所

「さかい福祉まつり」は開催されましたが、来場者は少なく午後には閑古鳥が鳴く事態に。サッカーW杯の日本対チュニジアのテレビ中継の影響か!? それでも缶バッジ作成に



来場された親子もいてくれました。が、この子のバッジはプレス時の台の不具合で失敗し、お母さんが描いた絵は突然の風で、どこかへ行ってしまいました。申し訳なかったです。来年は、スポーツ中継と重ならない日を願っています。

(竹内)



## 活動日誌

2026年5月～7月

### 5月

- 2日(土) 絵本読み聞かせ／OCAT 保育園
- 8日(金) 出前授業「国際理解」／和泉市立北松尾小学校
- 9日(土) アリス募金／JR 難波駅構内▽訪問／外貨と募金預かり
- 13日(水) 運営委員会▽ユニセフ・オンライン報告会
- 14日(木) 外貨募金持参
- 15日(金) 出前授業「SDGsについて」／大阪教育大学▽絵本読み聞かせ／OCAT 保育園
- 18日(月) 日本ユニセフ協会主催「相続セミナー：税金編」／難波市民学習センター
- 21日(木) 広報活動／四天王寺の縁日にて(～22日)
- 22日(金) 絵本読み聞かせ／OCAT 保育園
- 26日(火) 写真展(5/26～6/8)／香里ヶ丘図書館
- 27日(水) ボランティア連絡会
- 28日(木) 発送／ボランティア日より・6月確定表・7月予定表
- 29日(金) 広報・募金活動「御堂筋ふれあいバザー」／ガスパル前▽出前授業「平和学習」／大阪市立平野小学校▽絵本読み聞かせ／OCAT 保育園
- 30日(土) ゴンタ募金／近鉄大阪上本町駅構内

### 6月

- 3日(水) web ミーティング「SGDs マルシェ」／クラーク記念国際高等学校
- 5日(金) 来室出前授業／三重県いなべ市立員弁中学校▽外国コイン持参▽絵本読み聞かせ／OCAT 保育園
- 8日(月) 出前授業／大阪市立紛浜小学校

- 12日(金) 絵本読み聞かせ／OCAT 保育園
- 13日(土) アリス募金／JR 難波駅構内
- 17日(水) ボランティア連絡会▽外国コイン持参
- 18日(木) 送付／ボランティア日より・7月確定表・8月予定表
- 19日(金) 絵本読み聞かせ／OCAT 保育園
- 20日(土) ボランティア入門講座／大阪ユニセフ協会
- 21日(日) 広報・募金活動／「さかい福祉まつり」堺市役所前広場▽広報活動／四天王寺の縁日にて(～22日)
- 27日(土) ゴンタ募金／近鉄上本町駅構内
- 30日(火) 写真展(6/30～7/14)／大阪府立中央図書館

### 7月

- 1日(水) 出前授業「世界がもし100人の村だったら」／大阪市立白鷺中学校▽運営委員会
- 3日(金) 出前授業「平和学習」／大阪市立阿倍野小学校▽絵本読み聞かせ／OCAT 保育園
- 4日(土) アリス募金／JR 難波駅構内
- 6日(月) 募金引き取り／大阪市立磯路小学校
- 8日(水) 出前授業「平和学習・国際理解・教育問題」／摂津市立第二中学校
- 11日(土) 広報活動「ユニセフセミナー大阪2026」／大阪市中央公会堂
- 14日(火) 出前授業「平和学習」／八尾市立久宝寺小学校
- 21日(火) 広報活動／四天王寺の縁日にて(～22日)
- 23日(木) 写真展(7/23～7/31)／堺市役所
- 25日(土) ゴンタ募金／近鉄大阪上本町駅構内
- 26日(日) 学習協力「SDGs・小学生親子向け自由研究応援」／枚方市立さだ図書館
- 29日(水) ボランティア連絡会
- 30日(木) 発送／ボランティア日より・8月確定表・9月予定表

### 募金

2026年4月から6月まで募金を寄せられたのは個人111件、団体18件でした。

## 参加募集

ユニセフシアター第6回上映会

「歌声にのった少年」

逆境のなか、たくましく成長してゆくガザの子どもたち。

開催日時：2026年9月6日(日) 13:00～15:30 12:30開場

会場：ピースおおさか講堂(森ノ宮駅より徒歩7分)

参加費：無料 定員：100名

主催：大阪ユニセフ協会

「たこやきキャンパス」高校生実行委員会

後援：大阪府教育委員会

協力：ピースおおさか

申込QRコードはコチラ▶▶▶



## 編集後記

「子どもの権利」はなぜか苦手意識があり、本紙で取り上げる機会も少なかったと思います。ようやく今回セミナーで桜井先生の講演を記事にすることで理解が深まりました。編集しながら気づくことも多く、大人の都合で子どもを巻き込んでいた過去を深く反省しながらの作業でした。「子どもの権利」の考えがもっと浸透すれば、新しい社会のあり方が生まれるかもしれない、そんな予感がしました。(近藤)



大阪ユニセフ協会

大阪通信

2026年8月18日発行  
Vol.26 No.103(年4回)

制作・発行：大阪ユニセフ協会

〒556-0017 大阪市浪速区湊町1-4-1 OCAT2F  
火～土(祝日は除く) 午前11時～午後4時  
毎週月曜、日曜、祝日は休みます

印刷：株式会社 遊文舎

大阪ユニセフ協会  
ホームページはこちら→



お問い合わせ・お申し込み

TEL:06-6645-5123

FAX:06-6645-5124

URL: <https://www.unicef-osaka.jp>

Email: [un@unicef-osaka.jp](mailto:un@unicef-osaka.jp)